

圖版要項

一 高麗青磁象嵌鳳凰雲鶴文小箱 (原色版)

某 氏藏

縦 二一・八釐 (七寸二分) 横 一五・四釐 (五寸一分)
高 八・一釐 (二寸六分八厘)

高麗青磁の箱は高麗青磁のなかでも、特にすぐれ、遺品も四、五點を數えるのみで、最も貴重なものとされている。

本品はその一つで、白、黒の象嵌で蓋表中央、圓内に花喰の鳳凰を現わし、廻りに雲形文を配してそれを大きな格狭間形でかこみ、四隅に雲鶴文を置いて縁に連珠文帯を廻らし、蓋、身の側面に連辨を附している。

象嵌技術も精巧で、文様も絢爛たる性質のものであるが、釉や象嵌の色調、配合等によつて一種幽玄な趣すら感ぜしめるなかなかの優品である。そして、精巧な作を企てながら、蓋はややへたり、合せ口にはずれがあつて、そこには端正なうちに以外の氣易さが窺われ、又蓋、身の下邊にある釉だまりは實に美しい翠青色をなして、かえつて趣を添え、朝鮮工藝獨特の趣致もしのばれる。

その釉調もよく、作行粗厚ならず、文様も整齊されている點等からして、十八代毅宗より二十二代康宗 (一一四七—一二二一) 頃にかけての青磁象嵌盛期の作と推定される。

この類の東京國立博物館藏の青磁透彫箱は全羅南道と全羅北道の境の智異山麓から、元朝鮮總督府博物館の前者とはほぼ同じ透彫箱は全羅南道長興郡の高僧の墓から出土したと伝えられているが、本品については傳えを聞かない。

この箱は高麗青磁の優品であると共に、又文様に中國漆藝との關連が窺われ

注目に値する。即ちこの蓋表の意匠の構成様式は、福岡大泉坊、岡山淨土寺、廣島光明坊等の沈金經箱とほとんど同じであつて、沈金箱の文様は、蓋表、身の各面に施してあるが、中央に鳳凰、或いは孔雀等双鳥を現わし、周圍に雲形 (花形と見られるものもある) を配し、大きな格狭間形でかこみ、四隅に花文を置いて、縁取りをしており、青磁箱の鳳凰を圍む圓を除き、雲形の様式をかえ、雲鶴文を花文としただけの差異といえる。沈金箱は大泉坊、光明坊のものに元の延祐二年 (一一三五) の銘があり、他もほぼ同じ頃の作と見られているのであつて、青磁箱の製作期を推定の如くとすれば沈金の箱は少くも百年以上後のものと考えられるのである。

鳳凰や孔雀等を對向させて扱つた文様は、中國にては唐代には盛行していたのであり、宋代漆工の遺品について明らかでないにしても、この沈金の意匠から遡つて考え、又宋磁には格狭間形の文様を施したものがあつたことなどからして、宋代漆藝の意匠にこの沈金に見る如くものがあつたことは想像されよう。そして青磁透彫の箱には蓋に大きな剖面があつて、宋の器物の影響がみられるし、本品も恐らく、かかる宋代漆器の意匠を做つたものと思われるのである。従つて、遺品のほとんど無い宋代漆藝について、沈金箱より先行するものとしてその意匠の一端を示しているものともいえよう。(中川千咲)

二 黒漆立菊文螺鈿經箱及び蓋表題字 東京國立博物館藏

縦 三七・五釐 (一尺二寸四分) 横 一九・四釐 (六寸四分)
高 二六・六釐 (八寸八分)

三 黒漆牡丹唐草文螺鈿經箱 某 氏藏

—以上二—三 吉野富雄「高麗の螺鈿器」参照—

四 五百羅像 (第一百七十慧軍高尊者) 韓國國立博物館藏